

二〇二四年 夏号

海禅寺新聞

Vol.42

『海禅寺新聞』第42号

梅雨が明け、いよいよ夏らしい季節がやってきました。今年も酷暑の夏になりそうです。こまめな水分補給と休養をとりながら、どうぞご息災で過ごしてください。

既にご案内の通り、海禅寺では住職の寄付で本堂に大型エアコンを3台設置しました。下記にお知らせしております、お施餓鬼行事や寺で行う夏のご法事も、涼しい環境で皆さんと共に供養に専念できます。これまで暑さから夏季の法事を敬遠されていた方も、どうぞ本堂をご活用ください。

『生きる力・17号』送付

おなじみ真言宗智山派が発行する情報誌「生きる力」をお届けいたします。今回から始まった新しい連載をご紹介します。

○『よくわかる智山勤行式』(10ページ)

昨年、施餓鬼会の際、法話においてくださった佐々木大樹先生が執筆されています。海禅寺では春秋のお彼岸法要や、時にご法事で皆さんとお唱えしているお経本、「智山勤行式」の内容についてわかりやすく解説していく企画です。

○『梵字よもやま話』(14ページ)

お盆、そしてご法事の際に墓所へ手向ける卒塔婆(そとうば)に書かれている梵字の意味が説明されています。

施餓鬼会のご案内

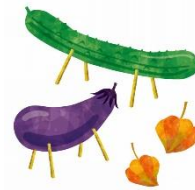
夏恒例の施餓鬼会法要、今年も昨年同様の時間帯で実施いたします。詳しくは同封の別紙、『施餓鬼会法要のご案内』をご覧ください。

日程…令和6年8月12日(月・祝日)
時間… 十時〇〇分 諸報告
 十時十〇分 法話(副住職)

演題『私と仏道』(仮)
十一時〇〇分 施餓鬼法要
十一時五十分 お塔婆授与(順次散会)

◎法要の前の法話は、私、副住職が担当いたします。寺に常住するようになって約18年になります。平素より檀信徒の皆様にとつて大切なご家族のご葬儀やお弔いのご法事、またはご祈祷などをお勤めさせていただいております。そうした私が、これまでどのように仏道を歩んできたかお話ししたいと思います。勿論、有り難い内容とは程遠いものになりそうですが、既に妙な汗をかいておりますが、人物理解をしていただきながら、皆さまに仏教の多様な側面をご紹介できたらと準備しております。

※海禅寺墓地にて、塔婆立てが古いお塔婆でいっぱいになっております場合は、それぞれの墓地脇に塔婆を寝かせて積み置いてください。境内外墓ご利用のお檀家さんの古いお塔婆も、寺にご持参いただければお焚き上げし、読経供養いたします。
(なるべくお盆中にお持ちいたただければ幸いです)



副住職の気まぐれ法話

地域の里山と信仰



海禅寺の背後に雄大な山容を見せる太郎山。標高は1164メートル。上田市民の山として、年間を通じて家族連れや遠足でたくさんの人たちが登っています。山頂の太郎山神社本殿は、市の有形文化財にも指定されており、上田が養蚕で盛んな頃は「養蚕の神」として信仰を集めていました。また、麓から仰ぎ見るとどつしりとしたその姿は、私たちを見守ってくれているように、太郎山そのものを神様として崇める風習は、古くからあったものと考えられています。そして東の東太郎山、西の虚空蔵山と合わせて、太郎山山脈と呼ばれています。この山脈のおかげで、上田は温暖で生活のしやすい気候なのだそうです。



さて、この太郎山山脈の北側に大峰山という山があることをご存じでしょうか？上田市民であれば誰もが知っている太郎山と対照的に、この大峰山の存在はあまり知られていません。大峰山と言えば、奈良県の南部にある霊山、大峯山が有名です。この山は修験道の開祖と言われる役行者(7〜8世紀に活躍)が最初期に開山した霊峰として、今もなお信仰の山として、多くの登山者が集まる修験道のメッカのような場所です。この聖地たるゆえんは、山頂で役行者が金剛蔵王大権現を感得し、蔵王堂を建立したのが開山である為で、今も修験道の根本道場となっています。現在の蔵王堂は国内で最高所に建つ国の重要文化財でもあります。また、2004年には、この

大峯山と修行の道である、大峯奥駈道が、世界文化遺産にも登録されました。

そうした重要な山、大峯山と同じ名前の山が上田にもあるのです。そして実は上田以外にも日本全国には「大峰山」(大峯山)と名付けられた山が数多くあります。奈良大峯山を守る護持院の御住職にお聞きしたのは、大峰山と同じ名前を持った山は、ほぼ間違いなく、地方に住む古の修験道修行者たちが、奈良の大峯山を想い、そして憧れ、地元の人に命名したものだだろうという事でした。またはその昔、奈良大峯山の先達方が、地方を巡錫する中で、似た山を見出した際に名付けたのかもしれませんが。

このような背景から、個人的に強い関心を持っていた上田の大峰山に、先月仲間と共に登拝する機会を得ました。太郎山裏参道の途中から縦走し大峰山目指して登りつめていくと、突如小さな広場に原木を使った鳥居が現れました。←



あくまで私の主観ですが、奈良大峯山の山上前にある五番関という場所を彷彿と

させる雰囲気を感じられます。そして雨の中、歩を進めながらふと視線を遠くに向けてみると、山々の狭間に雲海が広がり、まさに奈良大峯山の峯中が思い起こされました。そして急登を経て山頂へ。小さな祠があるのみでしたが、敬虔な思いが溢れてきました。静かに手を合わせて読経し、祈りを手向けさせていただきました。おそらくその昔の上田に住む山岳信仰者や、山人たちも、ここを祈りの場所としていたに違いありません。

私たちの先祖は、日々山の恵みを頂戴して里で暮らしていましたから、山の存在は、とても大きかったことでしょう。それに対して現代を生きる私たちは、生活に必要な恵みは山以外からいただくことが多くなっています。こうして生活の利便性が向上した一方で、生活と山との距離は離れていく一方です。

しかし時に身近な山を想い、心を通わせる時間を持つことで目覚める大切な感性があるように思います。私たちも大自然の一部。たとえ登山は難しいとしても、生活の中で身近な自然に親しみ、自身の野生を取り戻しながら、日常をしなやかに生きて参りましょう。

山行記 番外編

今回のルートは、太郎山表参道を登り、

太郎山山頂を経て大峰山↓水晶山↓芝峠↓大道山(堂叡山)↓鳩ヶ峰↓林道から坂城駅まで歩く休憩時間も含めると約9時間の長いものでした。

その後半でたどり着いた坂城町の大道山(堂叡山)も、深い信仰の息吹が感じられる山でした。

突如開けた山頂には見事な石像と石碑が鎮座しておりました。中央に「堂叡山」(御

嶽山)、左に「三笠山」、右に「八海山」の権現様の御姿が彫られた石像が佇んでいました。またその三者の右側には「堂叡山大日聖不動明王」の大きな石碑があり、さらにその右には「成田山」と書かれた不動明王の石像が。この存在について何の事前知識もなく、また誰にも会わない山中を歩き続けた挙句、突如目の前に現れた神仏と霊地に、驚きと共に畏怖の念を抱きました。この急峻な山頂までいったいどうやって大きな石像類を運び上げたのでしょうか。



堂叡山山頂から坂城の街を見下ろすように鎮座していた三尊の後姿

帰ってから調べてみると、大道山は、江戸時代の末には御岳山(おんたけさん)または堂叡山(どうえいざん)と呼ばれ、信仰の山として近郊郷に広く知られていたそうです。この地域で木曾の御嶽山を信仰する御岳講の信者さん達が、大道山を霊場として開山したのが始まりだといわれています。

文久3年(1863年)には、一心講という講が組織され、京都の醍醐寺へ参拝し、山号を堂叡山、院号を堂明院とすることを許されました。(現在も山頂にある石像にも一心講の表記が随所に見られました)

明治になって堂叡山の信仰はますます盛んになり、坂城町、四ツ屋の旧北国街道沿いには堂叡山の道しるべが建てられました。今はその信仰は下火になっているよ

うですが、往時には「堂叡山」は『日本三叡山の一つだ』と言われる程だったそうです。(三叡山…「比叡山」、「東叡山」(寛永寺)、「堂叡山」)とところでこの堂叡山山頂に祀られている三尊、御嶽山、三笠山、八海山の各権現さんのお名前は、海禅寺不動堂前の石碑にも彫られています。これは木曾の御嶽山を開山した普寛行者(1731年〜1801年)が感得した三尊です。海禅寺も御嶽信仰の影響を大きく受けて、真言密教を基礎にしながらご祈禱をしてきたのでしよう。御嶽信仰と海禅寺。大変に興味深いですね。次はぜひ御嶽山に登拝することができましよう、念じております。



海禅寺不動堂前にある三尊の名が彫られた石碑

海禅寺に仏弟子三名誕生

去る令和6年3月30日、京都にある総本山智積院道場において、海禅寺有縁の3名が得度いたしました。

「得度」(とくど)というのは、僧侶になる最初の儀式のことです。「得度」の「度」は、「渡る」を意味しています。つまり「得度」は「渡るを得る」、これは悟りの世界に渡る機会を得るということを指しています。つまり悟りを求めて仏道修行に入ること「得度」と言います。

総本山での得度式は一般には一切非公

開で行われ、管長猥下からお授けをしていただくことができます。3名は、副住職が師僧となり、真言宗智山派、第72世管長、大僧正 布施浄慧 猥下より、戒と法名を授かる勝縁に恵まれました。

得度したのは左記の3名です。

・俗名: 飯島 郷子(副住職長女) 法名: 俊郷

・俗名: 藤原 信親(副住職甥) 法名: 俊信

・俗名: 藤原 清親(副住職甥) 法名: 俊清

※海禅寺有縁の僧侶は法類の証として、歴代「俊」の一時を継承しています。



得度式を終えて智積院金堂前にて 左から俊信・俊郷・俊清

3名とも現在まだ小学生ですので、直ちに総本山で修行生活に入るわけではありません。しかし引き続き一般の生活をしながらではあります。正式に仏教者となりました。今後どのように人生を進めていくかは、彼らの意思と努力次第です。その中で機が熟した暁には、皆さんの海禅寺の護持発展に力を尽くす存在に育ってほしいと切に願っております。檀信徒の皆様におかれましては、以後お見知りおきいただき、どうぞお見守りください。